

英語の句動詞と英語教育 —基本動詞 break の句動詞の事例—

對馬 康博

0. はじめに

英語技能の習得において、統語を中心とする英文法や特定の語の使い方という語法はもとより、単語やイディオムなどの語彙力がものを言うこと言うまでもない。平成 26 年度現在、現行の中学校学習指導要領・高等学校学習指導要領を踏まえて、高等学校卒業時まで「3,000 語習得」という目標が掲げられ、その達成のために教師の教授や教授法という手腕が問われている。

前著(對馬 2013)では、「応用認知言語学(Applied Cognitive Linguistics)」の観点から英語基本動詞の教材開発の方法論を述べ、さらに教授案を示唆した。その際に事例として基本動詞 break を分析対象とした。本稿では、その成果の一部を土台として英語の句動詞の教授法を探求することを主たる目的とする。事例として基本動詞 break の句動詞を分析対象とする。

本稿の構成は以下の通りである。次の第 1 節では句動詞の概念を概観する。第 2 節では応用認知言語学の概念として、「身体性(embodiment)」の概念を導入する。第 3 節では身体性に基づく「イメージ性」をキーワードに基本動詞 break の句動詞を分析する。第 4 節ではその教授法を考える。第 5 節は結語である。

1. 句動詞の概念の点描

まず、「句動詞(phrasal verb)」の概念から確認しよう。句動詞は「群動詞」などとも呼ばれるものである。句動詞に関する辞書や語法書は洋書を中心に多々存在しており、その中から代表的なものをいくつか選択し、句動詞の定義をみてみよう。

- (1) a. A phrasal verb is a verb that consists of two or three words. Most phrasal verbs consist of two words—the first word is a verb, and the second word is particle. The particle is either an adverb or preposition. (Longman Phrasal Verbs Dictionary: xi)
- b. These combinations [=combinations of verbs with adverbial or prepositional particles] are generally called **phrasal verbs**. (Collins COBUILD Phrasal Verbs Dictionary: v)
- c. A **Phrasal verb** is a combination of a verb and an adverb, a verb and a preposition, or a verb, an adverb, and a preposition, which together have a single meaning. The adverb or preposition is sometimes called **particle**. (Collins COBUILD English Usage³: 397-398)

(角括弧内は對馬による、その他の強調は原著による)

これらのほとんどが形式(form)に関することであることに注意する必要がある。このことをまとめると次の3つの形式が句動詞の大きな区分として認められることになる。

(2) 句動詞の形式:

- a. 基本動詞 + 前置詞 + 名詞
- b. 基本動詞 + 副詞 (+ 名詞)
- c. 基本動詞 + 副詞 + 前置詞 + 名詞

具体的には(2a)のグループには(3)の look after ~ (一を世話する)や go into ~ (一を説明する)のようなものが相当し、(2b)には(4)の take off (離陸する)や make out ~ (一を理解する)などが対応する。また(2c)には(5)の put up with ~ (一を我慢する)や look down on ~ (一を軽蔑する)などが相当する。特に、(2a)と(2c)に関しては他動詞的ふるまいをすることは分かるが、注意しなければならないのは(2b)である。これにはさらに下位に2タイプが存在する。ひとつは(4a)のように自動

詞的なものであり、もうひとつは(4b)のように他動詞的なものである。

(3) **基本動詞 + 前置詞 + 名詞の事例:**

- a. I love looking after the children.

(私は子供たちの世話をするのが大好きだ.)

- b. It was a private conversation and I don't want to go into details about what was said.

(それは個人的な会話でどんな話しをしたかは詳しく説明したくない.)

(4) **基本動詞 + 副詞の事例 (+ 名詞)の事例:**

- a. We eventually took off at 11 o'clock and arrived in Juneau at 1:30.

(我々は11時にやっと離陸し、ジューノーに1時半に到着した.)

- b. I couldn't make it out at all. (私にはぜんぜんわからなかった.)

(5) **基本動詞 + 副詞 + 前置詞 + 名詞の事例:**

- a. They had put up with behavior from their son which they would not have tolerated from anyone else. (彼らは他人であれば耐えられないような息子の行動に我慢した.)

- b. I wasn't successful, so they looked down on me.

(私は出世しなかったので、彼らは私を見下した.)

(Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English, English/Japanese)

次に句動詞の意味や使用域について確認するために、次の引用を見よう。

- (6) a. We can often replace them with one word, which is more <formal>.

(Leech et al. 2001: 393)

- b. Particularly in informal English, phrasal verbs are common and numerous. Their meaning is idiomatic: we cannot easily infer what the expression means from the meaning of its parts.

(Leech 2006: 84-85)

- c. They [=phrasal verbs] are extremely common in English and are often a particular problem for learners of English. [...] One reason is that in many cases, even though students may be familiar with both the verb in the phrasal verb and with the particle, they may not understand the meaning of the combination, since it can differ greatly from the meanings of the two word used independently. (Collins COBUILD Phrasal Verbs Dictionary: v)

（角括弧内は對馬による）

これらの引用の中で意味に関する事項は大別して2つある。ひとつは句動詞の多くは一語の単語でパラフレーズ可能だということである。例えば、(3b)の go into ~は explain や(4b)の make out ~は understand などに対応するという具合である。もちろん(3a)の take off のように一語で対応できないものも存在する。もうひとつは句動詞がイディオム的であるという点である。特に(6c)で指摘されているように、句動詞の中には基本動詞及び前置詞と副詞からなる個々の構成要素からは推測がつかない意味を持つものがあるとされている。

しかしながら、全ての句動詞が構成要素から推測がつかないイディオムなのだろうか？この点に関して、Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1999)は英語教師向けに書かれた英文法書の大著であるが、句動詞を①Literal Phrasal Verb(字義通りの句動詞)、②Aspectual Phrasal Verb(相を表す句動詞)、③Idiomatic Phrasal Verb(完全にイディオムをなす句動詞)の3つのグループに分けている。①のグループには sit down や hand out のような句動詞が相当し、「基本動詞+方向を表す前置詞」から構成されている。簡素に言えば、基本動詞の行為の方向性を前置詞で表しているものである。②のグループには carry on や turn off などが当たり、前置詞が基本動詞の行為の終止・繰り返し・継続などの相(aspect)を補っているタイプである。③のグループは put off や catch up などが相当し、基本動詞や前置詞の個々の要素からは意味の推測がつかないものである。このように考えると、句動詞は字義通りのものからイディオム的なものまで連続的に捉えられる概念であることがわかる。

再び(6)の引用に戻ろう。この引用の中では使用域(register)に関しても述べられている。(6a)と(6b)で記されているように、句動詞は会話体(informal)で用いられやすいということである。この点に関して、Biber et al. (1999)はコーパスを用いてデータを統計処理し、その分析結果を次のように報告している。

- (7) Overall, phrasal verbs are used most commonly in fiction and conversation; they are relatively rare in academic prose.

(Biber et al. 1999: 408)

これが意味するのは、句動詞は会話体(conversation)の他に小説(fiction)でも良く用いられるということである。他方、学術的文章(academic prose)の中では比較的まれであるということである。

このように句動詞の使用域には傾向性があることは分かったが、Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1999)はさらに次のような興味深い指摘をしている。

- (8) [...] airline personnel often favor Latinate verbs over phrasal verbs, perhaps to assist nonnative speakers of English comprehend announcements. For instance, in the days when cigarette smoking was permitted on all airplanes, passengers were requested to “extinguish all smoking material,” prior to landing, rather than the more common “put out your cigarette.”

(Celce-Murcia and Larsen-Freeman 1999: 434)

これによれば、航空機内で喫煙が可能だった時代に搭乗客に着陸前にタバコを消すように求めるようなアナウンスの場面において、句動詞よりも一語の動詞が好まれ、これは英語非母語話者がアナウンスを理解するのを助けることが目的だという。では、なぜこのような使い分けが生じるのだろうか？ Celce-Murcia and Larsen-Freeman は使用域のためと論じているが、これには意味に関

する問題が関与していると思われる。その問題とは句動詞の中には「多義性 (polysemy)」を示す事例が数多く存在するということである。例えば、put out だけでも次のようないくつかの用例がある。

- (9) a. No one put out a press release aimed at the public.
(誰も一般向けの公式発表をしなかった。)
- b. Firemen tried to free the injured and put out the blaze.
(消防員たちは負傷者を解放して、燃え上がる炎を消し止めようとした。)
- c. He crossed to the nightstand and put out the light.
(横切ってサイドテーブルに行き、電気を消した。)
- d. Paula had put out her luggage for the bus.
(ポーラはバスのために荷物を出しておいた。)
- e. He put out his hand to Alfred. (アルフレッドに手を差し出した。)
- f. It is a very sociable diet to follow because you don't have to put anyone out.
(誰にも面倒をかけないので、つき合いやすいダイエットだ。)

(下線は對馬による)

(Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English, English/Japanese)

このように put out という句動詞は多くの意味を担う多義語であり、上の航空機の事例では乗客である聞き手が意味を取り間違わないようにする目的で一語の動詞で断言していると思われるわけである。

以上、この節では句動詞に関して、形式・意味・使用域の観点から点描してきた。このような多様性を示す句動詞をどのように教授すれば良いのだろうか？この点に関しては第3節で議論していく。

2. 応用認知言語学の基本精神—身体性 (embodiment) を中心に—

この節では、第3節及び第4節での本稿の議論の前段階として、応用認知言語学 (Applied Cognitive Linguistics) の概念を導入する。

理論言語学の中のひとつとして認知言語学(Cognitive Linguistics)と呼ばれる分野がある。認知言語学の基本精神は人間の認知の営みが概念形成に直結しており、言語化においても大きな役割を果たすというものである。簡素に言えば、言葉は人間の認知の営みによって動機付けられているという精神である。

このような言語観のもと、言葉と認知の営みについて考えてみよう。我々人間は自分を取り巻く世界の中で生きているが、その世界を切り分け、概念として掬い上げながら生活を営んでいる。そのような生活の中で、人間は自らの身体、すなわち、運動・感覚器官を通じて世界の情報を入手して脳内で処理している。そして我々はそのような世界の中で生じる事態や状況に注目し、それを様々な方法で捉えて概念化し言葉にしているわけである。このように脳や身体の動きが連携し概念化や心を作り上げているのであり、Lakoff and Johnson (1999)はこのような考え方に基づいて“embodied-mind hypothesis”を打ち出している。

- (10) [...] the very properties of concepts are created as a result of the way the brain and body are structured and the way they function in interpersonal relations and in the physical world. The embodied-mind hypothesis therefore radically undercuts the *perception/conception* distinction. In an embodied mind, it is conceivable that the same neural system engaged in *perception* (or in bodily movement) plays a central role in *conception*.

(Lakoff and Johnson 1999: 37-38)

「身体性(embodiment)」とは、(10)でもその本質が述べられているように、知覚(perception)と概念(conception)は切り離すことができず、運動・感覚器官に関わり知覚経験で使われる脳体系が概念世界の構築にも中心的な役割を果たすという考え方である。言葉が人間の認知の営みによって動機づけられている以上、我々の運動・感覚器官に基づく知覚経験が言葉に大きな影響を及ぼしていると考えられるわけである。さらに次の Langacker (2008)の引用をみよう。

- (11) Cognition is **embodied**. It resides in processing activity of the brain, which is part of body, which is part of the world. At the most basic level, we interact with the world through our senses and physical actions.

(Langacker 2008: 535)

認知は脳内の認知処理活動にあり、脳は身体の一部であり、身体は世界の一部である。人間は自らの感覚や身体運動という直接的知覚経験を通じて世界と情報のやり取りを行い、生活を営んでいるわけである。まさしくこうした考えは身体性の根底に通ずるものである。

このように、言葉を身体性の観点から考察すると、人間の運動・感覚器官に基づく知覚経験の重要性が見えてくる。つまり、そのような身体・知覚経験から得た情報が言葉として表現されているわけであり、言い換えれば、こうした経験から得られる「イメージ性」が言葉に反映しているわけである。

以上のような認知言語学の基本精神から英語教育に応用できることは何だろうか？言葉が人間の身体性に基づくイメージ性を反映している以上、英語教育において英語母語話者が抱くイメージ性を教育に積極的に取り入れて行くことが必要不可欠であると考え。そこで、本稿の以下の議論でもこのような応用認知言語学の精神に立脚して、英語の句動詞を分析し、その教授法について考えていくこととする。

3. 身体性に基づくイメージ性からみた基本動詞 break の句動詞

前節では身体性に基づくイメージ性の重要性を確認したが、本節ではそのような観点から英語の句動詞を考察・分析していく。

3.1 教材開発・分析における句動詞のイメージ性と意味規定の基準

英語教育において、教材開発や分析は欠く事ができない。もちろん、句動詞に関しても例外ではない。では、どのような基準に基づいて句動詞の教材開発や分析を行うべきか？本稿では、身体性に基づくイメージ性の観点を導入し、

句動詞の意味規定を行って行きたい。

差し当たり、句動詞の構成要素として、それぞれ動詞と前置詞ないし副詞の身体性に基づくイメージ性について考える必要がある。まず、動詞のイメージ性について考えてみたい。ふつう動詞は出来事や状況を表し、その典型例は人間の行為である。したがって、人間が関与する以上、そこには人間の身体性に基づくイメージ性が反映されるわけである。たとえば、動詞 *run* の典型例としての「走る」のような例であれば、人間の運動器官による動きが反映されるわけであるし、動詞 *break* の典型例としての「壊す」という行為でも、人間の運動器官による動きが反映され、あるモノが壊れるわけである。

次に、前置詞やそれと同形の副詞について考えてみよう。前置詞の典型例は上下左右などといった空間を表す用法であり、そこには人間の空間認知が関与する。ふつう、人間が上下左右を判断する際には、それを捉える人間の身体を基準にしているわけである。¹ また、前置詞と同形の副詞に関しても同じことが言える。たとえば、*about* は周囲を基本とするが、これも人間の身体を取り巻くことを基本とすることは容易に想像がつく。

以上のように、句動詞の構成要素の動詞や前置詞・副詞は人間の身体性に基づくイメージ性を反映するわけである。そこで本稿では句動詞を、(12)のように、基本動詞のイメージ性と前置詞もしくは副詞のイメージ性が融合したもの、つまり、動詞と前置詞ないし副詞のイメージ性のいわば「コラボレーション」として句動詞の意味を捉えてみたい。

(12) 句動詞の意味規定の基準: 基本動詞のイメージ性 × 前置詞・副詞のイメージ性

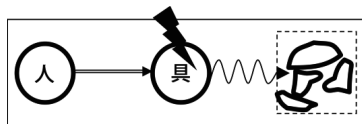
もちろん、句動詞の意味は個々の構成要素に完全に還元できるものからできないイデオロジック的なものまでであるが、本稿ではどのような句動詞においてもこのような身体性に基づくイメージ性が意味規定の根底にあり、そこから意味が拡張していくという仮説に基づいて分析を進めて行く。²

3.2 基本動詞 break の意味構造—對馬 (2013) の成果から—

對馬(2013)では英語基本動詞の教材開発論として、英語の基本動詞 break の用例を中心に分析を行った。そこでは人間の認識の観点、つまり本稿でいう身体性に基づくイメージ性の観点から break のプロトタイプ(すなわち、典型例)として(13)のような意味を想定し、図1のような図式を示した。

(13) **break のプロトタイプ**: 「人が具体物に力を加えて形(・機能)を壊す」

(對馬 2013: 51)



○: 人・具体物・抽象物

⇒: 「壊す」という力

⚡: 「破壊・亀裂」

〰️: 「安定した状態が壊れる」という状態変化

(ibid.)

図1: break のプロトタイプ

また、こうした意味規定と図式によって(14)のような用例が説明可能となった。

- (14) a. John broke the window. (ジョンが窓を割った。)
b. Mary broke the dish when she was washing it. (メアリーは皿を洗っている時に割ってしまった。)
c. He broke his leg while playing soccer. (彼はサッカーをされていて足の骨を折った。)
d. Don't get sore. I didn't mean to break the dish.
(怒らないでよ。わざとお皿を割ったわけじゃないんだよ。)

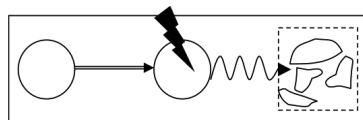
(c-d: E-DIC) (ibid.: 51-52)

いずれの例も主語である人が目的語である具体物に力を加えて形(ないし機能)を壊しているわけである。もちろん典型例であるから、それから拡張した事例も生じてくる。例えば、“The hammer broke the window.”のような例であれば、主語は人ではなく、具体物である。また、“The accident broke her leg.”のような事例であれば、主語は具体物であるよりも抽象物である。同様に“His joke broke the tension.”のような例であれば、もはや何かが物理的に壊れるというよりも、抽象物が抽象物に力を加えその機能を損なわせるような意味が生まれる。さらに、“The sad news broke his heart.”のような事例であれば、抽象物が人間の内面に力を加えて感情を損なわせるというような意味が生じる。

このように考えていくと、主語や目的語の項にどのようなものを取るのかによって break は様々な意義展開をみせる多義語であることがわかる。こうした事例の共通性を捉えるため、對馬(2013)は様々な break の事例の共通項として次のような意味規定と図式を示した。

(15) **break** のスキーマ: 「ある実体(人・物・抽象物)が別の実体(人・物・抽象物)に力を加えて安定した状態を壊す」

(對馬 2013: 64)



○: 人・具体物・抽象物

⇒: 「壊す」という力

⚡: 「破壊・亀裂」

⚡: 「安定した状態が壊れる」という状態変化

(ibid.: 65)

図 2: break のスキーマ (イメージ性)

スキーマとは様々な事例から抽出したあらゆる事例もしくは大部分の事例に

適用可能な構造のことをいうが、これによって(14)のような典型例以外のものを含めて様々な事例の意味規定が可能となった。

以上のことを踏まえて、本稿でも對馬(2013)の成果を導入し、(15)の意義と図2の図式を break の身体性に基づくイメージ性として採用していくこととする。

3.3 基本動詞 break の句動詞の分析

本節では 3.1 で確認した句動詞の意味規定の基準と 3.2 節でみた基本動詞 break の身体性に基づくイメージ性を導入し、句動詞の分析を行っていくこととする。まず、次の引用をみよう。

- (16) **Break** is often used with adverbs and prepositions when it means 'to separate, or make something separate, into two or more pieces, for example by hitting or dropping it' [...].

(*MACMILLAN Phrasal Verbs plus*, break 頁)

(16)は動詞 break の句動詞の意味規定を抽象的に物語っているものである。この中の break の意味は(15)で導入したイメージ性と共通していると考ええると、break の句動詞の意味規定に関わる残りの問題は前置詞ないし副詞のイメージ性と break のイメージ性と前置詞ないし副詞のイメージ性が融合したイメージ性ということになる。したがって、break の句動詞の意味基準は次のように定式化することができる。

- (17) **break 句動詞の意味規定の基準:** (15)の動詞 break のイメージ性 × 前置詞・副詞のイメージ性

次節以降では、この基準にしたがって、事例として break の句動詞でも典型的な break away, break down, break in, break into, break out, break through, break up の分析を試みる。

3.3.1 break away の事例

事例として、句動詞 **break away** から分析してみよう。まず、副詞 **away** のイメージ性であるが、次の英英辞典の定義を参考に考えてみよう。

- (18) a. used to say that someone leaves a place or person, or stays some distance from a place or person (LDOCE)
 b. to or at a distance from sb/sth in space or time (OALD)

これらの定義上から言えることは、**away** はあるモノが他のあるモノ・空間・時間などから「離れている」ことを意図するということである。もちろん、身体性の観点からすると、我々の肉体から離れている感覚や経験を基盤としている。したがって、**away** のイメージ性は次のように図式化できる。

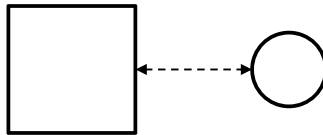


図 3: **away** のイメージ性: 「離れている」

これを基に、句動詞 **break away** の意味を考えてみよう。(17)の句動詞の意味規定の基準に従えば、**break** のイメージ性と副詞 **away** のイメージ性が融合されるわけであるから句動詞 **break away** の意味は次のように規定できる。

- (19) **break away** の意味: 「ある実体(人・物・抽象物)が別の実体(人・物・抽象物)に力を加えて安定した状態を壊し、離れた状態になる」

この意味に従って、(20)の例を考察してみよう。

(20) a. Latvia broke away from the Soviet Union and became a separate country.

(ラトビアはソ連から分かれて独立国家になった。)

b. A wing broke away, and the plane crashed in the sea.

(翼がもげ、飛行機は海に墜落した。)

c. The man tried to break away from the guards who were holding him.

(その男は、押さえつけている看守を振り払って逃げようとした。)

(E-DIC)

(19)の意味から(20a)では「(安定物から離れて)独立する」や(20b)の「(安定物から離れて)もげる」や(20c)の「(ある安定状態から離れて)逃げる」という意味が拡張するということが容易に想定することが可能となる。

このように、break away は break のイメージ性と away のイメージ性が融合したもものから規定が可能である。

3.3.2 break down の事例

次に、句動詞 break down の事例について考えてみよう。down のイメージ性を確認するために次の定義をみよう。

(21) a. to or towards a lower place or position (LDOCE)

b. to or at a lower place or position (OALD)

この定義によれば、down のイメージ性は「垂直上方向から下方向への移動もしくはその状態にある」ということになる。身体性の観点からすると、我々の身体の上下運動のうち、座る・しゃがむ・寝る・倒れるなどの下方向への運動からこの感覚が想起できるわけである。こうしたことから down のイメージ性は以下のように図式化できる。

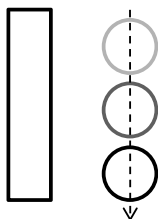


図 4: down のイメージ性: 「垂直上方向から下方向への移動もしくはその状態にある」

これを基に、句動詞 break down の意味を考えてみたい。(17)の句動詞の意味規定の基準に従えば、この句動詞の意味は次のように規定できる。

- (22) **break down** の意味: 「ある実体(人・物・抽象物)が別の実体(人・物・抽象物)に力を加えて安定した状態を壊し、垂直上方向から下方向への移動もしくはその状態になる」

この意味に従って、(23)の例を検討してみよう。

- (23) a. When our car broke down, we had no choice but to hoof it to the next town.
(自動車が故障し、私たちは次の町まで、てくてく歩くしかなかった。)
- (23) b. Acid breaks down food in the stomach.
(胃の中で酸が食物を分解する。)

(E-DIC)

(22)の意味から(23a)では「(安定した状態から下方向へ移動して)故障する・壊れる」という意味になる。もちろん、ここではメタファー的意味を表しているのであるが、字義通りに考えたとしても、ある安定物が下方向に移動することは壊れることを意図することがある。例えば、そびえ立っている壁が下方向に移動することは「崩れる」ことを意図する。また花であれ生物であれ、活

力のある状態では上方向を向いている一人間であれば歩行するし、花であれば陽の光を求めて陽の方向に向く一であり、それが損なわれることは故障を意味する一人間であれば寝込むし、花であれば萎れる。このようなことを我々は日常の身体経験を通じて知っているわけであり、このような身体性に基づくイメージ性がこの **break down** というイディオムにも反映しているわけである。(23b)も同様であり、安定した状態から(下方向へ移動して)壊れることは「分解する」ことを意味し、すなわちこの場合では酸の分解を意図した意味合いが生まれるわけである。

やはり、**break down** も身体性に基づいて **break** のイメージ性と **down** のイメージ性が融合したものから規定が可能なわけである。

3.3.3 **break in** の事例

次に、句動詞 **break in** の事例について考察したい。**in** のイメージ性を確認するために再びその定義をみてみよう。

- (24) a. used with the name of a container, place, or area to say where someone or something is (LDOCE)
- b. at a point within an area or a space (OALD)

これらの定義から言えることは **in** が「空間の中にある」という共通項をもつことである。身体性の観点からすると、身体が空間の中で存在していたり、空間に身体が包みこまれたり、身体の中を意図したりする身体経験を人間は常日頃から無意識にでも感じている。こうしたことから **in** のイメージ性は次のように図式化できる。

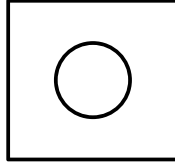


図 5: in のイメージ性: 「空間の中にある」

これを考慮して、句動詞 **break in** の意味を考えてみよう。(17)の句動詞の意味規定の基準に従えば、この句動詞の意味は次のように規定できる。

- (25) **break in** の意味: 「ある実体(人・物・抽象物)が別の実体(人・物・抽象物)に力を加えて安定した状態を壊し、ある空間や状態の中にある」

この意味を基に次の例で考えてみよう。

- (26) a. The fireman broke in the door and called the child's name.
(消防士はドアを押し破り、その子の名前を呼んだ。)
b. A sudden loud noise broke in upon my thoughts.
(突然大きな音がして、考えが中断してしまった。)

(E-DIC)

(25)の意味からして、(26a)では「安定物を壊してある空間の中に入る」わけであるから「押し壊す・押し破る」という意味が生まれるわけであるし、(26b)のように「安定状態を壊してある状態の中に入る」わけであるから「中断する・割り込む」という意味が生まれるわけである。

このように **break in** も身体性に基づいて意味規定することが可能である。

3.3.4 break into の事例

次に句動詞 break into についてみてみよう。into のイメージ性を確認するためにその定義を確認したい。

- (27) a. to the inside or inner part of a container, place, area etc (LDOCE)
b. to a position in or inside sth (OALD)

これらの定義から言えることは、into のイメージ性は「空間の外から中への移動」である。我々は、身体と共に空間の外から中へ移動したり、身体の中に食物を取り込むなどの身体経験をしながら生活を営んでいる。そこでこの身体性に基づき、into のイメージ性を図式化すると次のようになる。

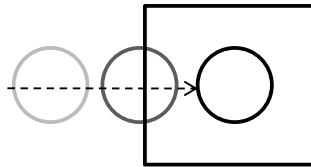


図 6: into のイメージ性: 「空間の外から中への移動」

これを基に、句動詞 break into の意味を考えてみよう。この句動詞の意味は次のように規定できる。

- (28) **break into の意味:** 「ある実体(人・物・抽象物)が別の実体(人・物・抽象物)に力を加えて安定した状態を壊し、空間や状態の外から中へ移動する」

これを基に次の用例を考えてみよう。

- (29) a. Somebody broke into my place and lifted my TV set.
(空き巣に入られて、テレビを盗まれちゃったよ。)

- b. He broke into the movies as a child actor.
(彼は子役として映画界に入った。)
- c. The girl suddenly broke into tears.
(その女の子は突然、泣き出した。)
- d. The audience broke into laughter.
(観衆はどっと笑った。)
- e. Hey! You can't break into the line like that! We were here before you!
(おい！ そんなふうに割り込んじゃだめだよ！ ぼくたちがきみより先に並んでいたんだぞ！)
- f. An announcer broke into the program with an emergency bulletin.
(臨時ニュースで、アナウンサーが番組に割り込んだ。)

(E-DIC)

break into は多義語であり、様々な意味を拡張させる。まず、(29a)では「安定物を壊して外から中に入る」わけであるから「(空き巣などが)押し入る」という意味が生まれる。また、(29b-f)では「安定した状態を壊して外から中に入る」わけであるから、(29b)では「進出する」や(29c)では「涙が流れる状態に入る」わけであるから「わっと泣き出す」という意味、また(29d)では「笑う状態に入る」わけであるから「どっと笑う」という意味などが産出される。これらと同様に(29f)では「臨時ニュースが入る」わけであるから「割り込む」という意味が生まれるわけである。

以上のように break into という多義語も身体性に基づいたイメージ性から個々の意味を規定することが可能である。

3.3.5 break out の事例

さらに、句動詞 break out の事例について考察しよう。まずは out のイメージ性を確認することからはじめたい。

- (30) a. from inside an object, container, building, or place (LDOCE)
b. away from the inside of a place or thing (OALD)

この定義から、out のイメージ性が「空間の内から外へ移動した状態」であることが分かる。into の逆に、我々は、身体と共に中から外へ移動したり、身体の中から不要物を分泌したり排泄したりなどの身体経験をしながら生活を営んでいる。そこでこうした身体性を生かしたイメージ性を図式化すると次のようになる。

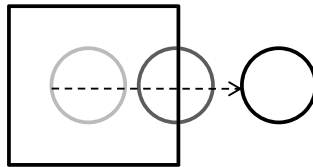


図7:out のイメージ性:「空間の内から外へ移動した状態」

これを基に、句動詞 break out の意味を考えてみたい。この句動詞の意味は次のように規定できる。

- (31) **break out の意味:** 「ある実体(人・物・抽象物)が別の実体(人・物・抽象物)に力を加えて安定した状態を壊し、空間や状態の中から外へ移動した状態になる」

この意味規定を次の事例で考察したい。

- (32) a. No one knows when a fire will break out. Firefighters must be prepared to move the moment the balloon goes up.

(火事がいつ起こるかなどだれにも分からない。消防士は、いざ起きたら即刻、出動できるように、態勢を整えていないといけない。)

- b. If war breaks out, the whole world may be dragged in.

(もし戦争が始まったら、全世界が引きずり込まれるかもしれない。)

(E-DIC)

(32a, b)では空間移動ではなく、メタファー的意味を表しているが、「安定した状態が壊れ中から外へ出た状態になる」という身体性に基づくイメージ性を反映した抽象的意味から「発生する・勃発する」という意味が自然に拡張すると思われる。

このようなメタファー的事例でも身体性に基づくイメージ性から規定することが可能なわけである。

3.3.6 break through の事例

次に、句動詞 break through の事例について考察したい。through の身体性に基づくイメージ性を確認するために再びその定義をみてみよう。

- (33) a. into one side or end of an entrance, passage, hole etc and out of the other side or end (LDOCE)

- (33) b. from one end or side of sth/sb to the other (OALD)

この定義から言えることは、through のイメージ性が「空間の中を貫通して抜ける」ということである。我々人間は空間として筒のようなものを通り抜けるという身体経験をすることがあり、また体内に食物を取り込み、不要物を排泄するなどの身体経験を日常的に行い、生活を営んでいる。こうした身体経験が through のイメージ性にも反映されている。これを図式化すると次のようになる。

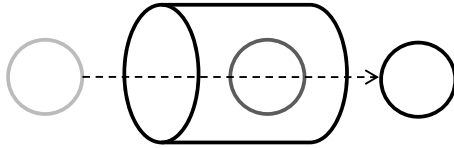


図 8: through のイメージ性: 「空間の中を貫通して抜ける」

こうした through のイメージ性に従って、句動詞 break through の意味を規定すると次のようになる。

- (34) **break through の意味:** 「ある実体(人・物・抽象物)が別の実体(人・物・抽象物)に力えて安定した状態を壊し、空間や状態の中を貫通して抜ける」

これを基に次の例を考えてみよう。

- (35) a. In that society, it is difficult for outsiders to break through the cultural barriers.
(その社会では、よそ者がその文化的障壁を乗り越えるのは難しい。)
- b. The prisoners broke through the wall and took to the hills.
(囚人たちは脱獄し、逃亡した。)
- c. The rain stopped and the sun broke through (the clouds).
(雨がやみ、太陽が(雲の切れ間から)顔をのぞかせた。)

(E-DIC)

(35a)はメタファーの意味だが、「安定した状態を壊しある状態を抜ける」わけであるから「乗り越える・切り抜ける」という意味が発生する。また、(35b)も同様に「刑務所の壁を抜ける」ということは「脱獄する」という意味が生まれる。さらに、(35c)では「雲が広がっている安定状態が壊れ、陽の光が雲間から抜ける」わけであるから「現れる」という意味が産出されるわけである。

やはり、break through のような句動詞も人間の身体性に基づいたイメージ性が意味規定に反映しているのである。

3.3.7 break up の事例

最後に句動詞 break up の例を考察しよう。まずは up の身体性に基づくイメージ性を確認することからはじめたい。

(36) a. towards a higher place or position (LDOCE)

b. towards or in a higher position (OALD)

我々人間は立つや視線を上昇させて見上げるなどの行為を上下運動の身体経験に基づき行っているが、up のイメージ性は down とは逆の「垂直下方向から上方向への移動」であり、これを図式化すると次のようになる。

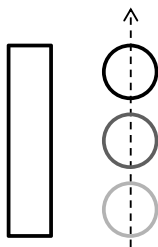


図9:up のイメージ性: 「垂直下方向から上方向への移動」

この up のイメージ性に従って、句動詞 break up の意味を規定すると次のようになる。

(37) **break up の意味:** 「ある実体(人・物・抽象物)が別の実体(人・物・抽象物)に力を加えて安定した状態を壊し、垂直下方向から上方向への移動もしくはその状態になる」

これに基づいて次の例を考えてみよう。

- (38) a. Our teacher stepped in and broke up the fight.
(担任の先生が割って入って、けんかをやめさせた。)
- b. The party broke up about midnight.
(パーティーは夜の 12 時ごろにお開きとなった。)
- c. Soon the clouds broke up and we could see the mountain.
(まもなく雲が細かくちぎれて、山が見えてきた。)
- d. “I hear you and Jane broke up.” “Yeah. Such is life, I guess.”
(「あなたとジェーン、別れたって聞いたけれど」「そうなんだ。人生
ってこんなもんだよなあ」)

(E-DIC)

(38a)はメタファーの意味だが、「安定状態を壊して垂直下方向から上方向への移動した状態になる」ということは、喧嘩という継続状態を壊すわけであるから「喧嘩に割って入る」という意味が生まれる。また(38b)では「パーティーの安定状態が壊れ垂直下方向から上方向への移動した状態になる」とは移動はメタファー的であるが、パーティーという一定時間の状態が上方向へ放出し飛び散ることを意味し、「解散する」という意味が発生する。同様に、(38c)では「雲が安定した状態を壊して垂直下方向から上方向へ移動する」とは雲の固まりが上方向に広がり分散することを想起させ、「散る」という意味が産出される。また、(38d)の「人のグループが安定状態を壊し垂直下方向から上方向へ移動する」とは移動はメタファー的であるが、2 人の交際の安定状態が下から突き上げられるようなことを想起させ、そこから「別れる」という意味が生まれる。

このように、break up もイメージ性から意味を規定していくことが可能なわけである。

3.4 基本動詞 break の句動詞のまとめ

3.3 節で想定したように、基本動詞 break の句動詞の意味は動詞 break のイメージ性と前置詞ないし副詞のイメージ性が融合したイメージ性である。したがって、(17)の break 句動詞の意味規定の基準を保持していることになる。句動詞の意味は字義通りのものはもとより、メタファー的で一見するとイディオム的とみられるような用例についても、基本動詞と前置詞ないし副詞の融合的視点の身体性に基づくイメージ性からある程度意味を導くことが可能であることが分かった。³

4. 句動詞の教授法の指針

第3節では句動詞の意味規定は基本動詞のイメージ性と前置詞ないし副詞のイメージ性の融合的イメージ性からある程度規定可能であることを報告した。本節ではこのように捉えられる句動詞の教授法の指針について示唆したい。

まさしく、句動詞専用の辞書がある位であるから、句動詞全体の総数は数え上げることができない程存在している。また、ひとつの基本動詞でも前置詞ないし副詞の組み合わせ次第でたくさんのバリエーションがある。さらに、ひとつの句動詞自体にもいくつかの意味があるものがあり、多義語であると言える。このように多様な側面を見せる句動詞をどのように教育すれば最も効果的な成果を上げることができるだろうか？もちろん、ここでいう最も効果的な成果とは学習者が句動詞を習得し、コミュニケーションの中で運用できるという意味である。

ひとつのアプローチとして、英語の句動詞を日本語に訳した「訳語」の暗記という手法が考えられる。しかしながら、先に述べたように句動詞はたくさん存在し、一つの句動詞でもいくつかの意味を持つ多義語である。これを一対一方式の訳語丸暗記法では到底習得が追いつかないと思われる。もし追いついたとしても、実際に使われるコンテキストの中で、様々に解釈が可能である場合もあり、その際に学習者は逐語訳では対応できないはずである。

では、これに代わる方法はないであろうか？本稿では、身体性に基づいた句

動詞のイメージ性によるアプローチを推奨したい。先に確認したように、句動詞の意味は基本動詞のイメージ性と前置詞ないし副詞のイメージ性の融合的イメージからある程度規定可能であることを提案した。そこで、句動詞の教育に当たっては、まずは基本動詞のイメージ性を導入し、さらに、前置詞ないし副詞のイメージ性を導入してはどうだろうか。それを踏まえた上で、基本動詞のイメージ性と前置詞ないし副詞のイメージ性の融合的イメージ性を反映するものとして句動詞を導入してはどうだろうか。特に平成 26 年度現在の高等学校学習指導要領では英語の授業は基本的に英語で実施することがうたわれているわけであるから、そこに訳語を挟む余地はない。つまり、訳語の「脱丸暗記」が必要であることは言うまでもない。この意味において、代わりとなる身体性に基づくイメージ性の教授手法の導入を推奨したい。

このような身体性に基づく語彙分析や語彙指導の方法論は、道具立てなど違いはあるものの、本稿以外にも上野(2007)・上野(ほか)(2006)や森山(ほか)(2010)などで展開をみせており、こうした身体性からのアプローチが脚光を浴びている。また、2014 年と 2015 年には、それぞれ 3 冊ずつ、計 6 点の高等学校向けの英語副教材として、このような視点から開発された『MEW シリーズ』（いづな書店）という英語語彙のエクササイズブックが刊行されており、現場でもこのような教授法が芽を出してきている。今後このような身体性に基づくイメージ性からの方法論による英語教育が普及していき、その実践報告が待たれる。

5. 結 語

本稿では、身体性に基づくイメージ性をキーワードとして、英語の句動詞の意味規定を試み、その教授法を示唆した。特に、句動詞の意味規定は基本動詞のイメージ性と前置詞ないし副詞のイメージ性の融合的イメージ性からある程度規定可能であり、かつ、そのような方法論を用いて英語教育を実践すべきであるという指針を示唆した。

<注>

¹ このような空間認知に関するより詳細な分析や専門的な分析は井上(1998)や今井(2010)等を参照のこと。本稿での空間認知に関する指摘はあくまでも一般的な話として紹介しているにすぎない。

² もちろんここでの仮説は英語教育上に関わる教材分析上の仮説であり、理論言語学的に厳密に分析することを考慮したものではない。

³ もちろん全ての句動詞の全ての用法でこのようなアプローチが可能であるかどうかは今後詳細に検討しなければならない。ここでの分析結果は傾向性を示したにすぎない。

<参考文献>

Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Longman.

Celce-Murcia, Marianne and Diane Larsen-Freeman. 1999. *The Grammar Book*. 2nd edition. Boston: Heinle & Heinle Publishers.

今井むつみ. 2010. 『ことばと思考』 東京: 岩波書店.

井上京子. 1998. 『もし「右」や「左」がなかったら』 東京: 大修館書店.

Lakoff, George and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh*. New York: Basic Books.

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar*. Oxford/New York: Oxford University Press.

Leech, Geoffrey. 2006. *A Glossary of English Grammar*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Leech, Geoffrey, Benita Cruickshank, and Roz Ivanič. 2001. *An A-Z of English Grammar and Usage*. 2nd edition. Harlow: Longman.

森山智浩(ほか). 2010. 『英語前置詞の概念—認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から—』 名古屋: プイツーンソリューション.

對馬康博. 2013. 「英語基本動詞の教材開発論—応用認知言語学からのアプローチ—」 『文化と言語』 第78号. 札幌大学外国語学部紀要. 29-74.

上野義和. 2007. 『英語教育における理論と実践—認知言語学の導入とその有用性—』 東京: 英宝社.

上野義和(ほか). 2006. 『英語教師のための効果的語彙指導法—認知言語学的アプローチ—』 東京: 英宝社.

<辞書・辞典>

Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English, English/Japanese.

Collins COBUILD English Usage. 3rd edition.

Collins COBUILD Phrasal Verbs Dictionary.

英語の句動詞と英語教育—基本動詞breakの句動詞の事例—（對馬）

『E-DIC』第2版. (CD-ROM) 東京: 朝日出版社.

Longman Dictionary of Contemporary English. 5th (LDOCE).

Longman Phrasal Verbs Dictionary.

MACMILLAN Phrasal Verbs plus.

Oxford Advanced Learner's Dictionary 8th (OALD).

Oxford Phrasal Verbs Dictionary for Learners of English.